

# 仏書と歌書の〈リファレンス〉

会期 令和8年(2026)4月1日〔水〕～5月30日〔土〕

会場 鶴見大学図書館 1階 エントランスホール

## はじめに

私たちの知的な営み——たとえばレポートや卒業論文を作成する上で、先行する資料や情報を参照するという行為は不可欠のものです。そしてそのためには、先行する資料や情報を〈集める〉〈整理する〉〈使いやすく加工する〉といった作業が、重要な意味をもちます。それは、今も昔も同様でしょう。

現代は、各種データベースなどを検索したり、Excelなどのソフトで情報を整理したりすれば、先行する資料や情報を〈集める〉〈整理する〉〈使いやすく加工する〉ことが簡単にできる時代です。しかし、こうした便利なものがまだ存在しなかった頃、中でも和紙に筆で文字を書くのが一般的だったような時代には、こうした作業をおこなうのも、ひと苦労であったに違いありません。

それでは、そのような時代の人々は、先行する資料や情報を〈集める〉〈整理する〉〈使いやすく加工する〉うえで、どのような工夫をしていたのでしょうか。本展示では、日本でおこなわれてきた知的営為の中でも、先行する資料や情報を参照する必要が特に高かった分野である**仏教**と**和歌**の事例に焦点を当て、こうした先人たちの工夫の一端を垣間見たいと思います。

なかの あきまさ  
担当：中野顕正（本学文学部日本文学科准教授）

【関連企画】 仏教文学会例会 シンポジウム

## リファレンスとインデックス ——仏教・和歌から考える——

日時 令和8年(2026)5月9日〔土〕 13:00～17:30

場所 鶴見大学5号館 1階 5-101教室

登壇者 猪瀬千尋（金沢大学）、中野顕正（鶴見大学）、

川上一（国文学研究資料館）、甲斐温子（静岡大学）

入場無料。非会員の方のご来聴も歓迎します。

# 1 仏書の〈リファレンス〉

## (1) 仏書のインデックス「分科」

仏教の分野で何らかの著述活動を行おうとすれば、その前提として、經典や先人たちの著作など様々な文献を読み込み、深く適切に理解することが不可欠です。それに伴って、先行する様々な文献を〈整理する〉〈使いやすく加工する〉ための工夫が、仏教典籍の分野では発達しました。

先行する文献を論点整理し、使いやすく加工するうえで、最も基礎的な作業は段落分けでしょう。ある文献（たとえば經典）を細かく精緻に段落分けし、それぞれの段落に適切な標題を付けてゆくことで、その文献の全体構造や論理展開を捉え、ポイントとなっている論点をあぶり出すことが可能となります。

仏教では、こうした段落分けのことを「**分科**」<sup>ぶんか</sup>とといいます。以下では、仏教典籍をめぐる「分科」のさまざまなを見てゆきましょう。

【1】法華經化城喻品断簡 [平安末期] 写 伝・聖徳太子御筆

【2】法華文句科解 寛永十七年（1640）刊

日本人にとって極めて馴染みの深い仏教經典の一つに『法華經』<sup>ほけきょう</sup>があります。古くは聖徳太子がこの經典を重視したと伝えられ、また平安時代以降の日本文化に多大な影響を与えた天台宗の根本聖典でもあることから、貴顕による写經の事例は数多く、『法華經』を題材とした文芸や絵画なども多数制作されるなど、日本の文学・文化を語る上では欠かせない經典です。

この『法華經』の注釈書として一般に用いられていたのは、中国天台宗の第三祖と仰がれる隋代の僧・天台大師智顛<sup>てんだいだいしちぎ</sup>（538-97）の講義録である『法華文句』<sup>ほっけもんぐ</sup>です。『法華文句』では、『法華經』全体の段落構造を示しつつ、個々の經文に即して教義上の議論を展開するという構成が取られています。このように、經典を解釈する際に段落分けを示すという方法は、中国の南北朝時代以来、さかんに行われていたものでした。

【1】鶴見大学図書館蔵。登録番号1396194（登録書名「[妙法蓮華經]（断簡）」）。[平安後期]写。断簡1葉（1行分）。本紙25.5×1.8cm。銀界線あり（界高19.7、行幅1.8cm）。本文「度後復有弟子不聞是經不知不覺菩薩所」（T09.025c14-15）。極札「聖徳太子 [琴山]」が添う。

【2】鶴見大学図書館蔵。登録番号1289570～92。寛永十七年（1640）四月中野是誰刊の『摩訶止観科解』（登録番号1289544～69）と同時期・同版元の刊であろう。袋綴23冊。28.1×20.0cm。栗皮表紙、左肩に刷題簽「法華文句科解」（外題下部に巻番号を記す）を貼付。匡郭20.9×16.2cm。半丁10行、各行19字。内題「法華文句科解卷第一之一（～十之二）」。

但し第一冊は冒頭に神迫「天台法華疏序」を載せ、その後に内題を示す。智顛『法華文句』と湛然『法華文句記』とを会本にし、上部欄外に科段図を併載したもので、**本**は『文句』、**末**は『文句記』を表す。最終冊末尾に積亮憲および積真慶の跋を具える。最終冊の裏見返しに「寄進人田井田端氏／喜兵衛／長覺寺／立善什物」「文化十一戊八月十七日／法光院蓮成華果」「皆正月廿二日」と墨書。

【3】観普賢經私記 建保五年（1217）以前写 禅寂筆

『法華經』は、単独で取り扱われることも勿論ありますが、『無量義經』『観普賢經』とあわせて「法華三部經」と総称されます。すなわち、『無量義經』は『法華經』に対する開經（教えのあらましを序説的に説いた經典）、『観普賢經』は結經（教えの内容を締めくくるための經典）と位置づけられていました。

こうした事情から、『法華經』を根本聖典として崇める天台宗では、それと一体のものとして、『無量義經』や『観普賢經』もまた尊重されてきました。現在伝わる『観普賢經』の注釈書としては、平安時代初期の智証大師円珍（814-91）のものが著名ですが、目録類などによれば、それに先行する慈覚大師円仁（794-864）の注釈書もかつては存在していたと伝えられています。

ここに展示した『観普賢經私記』も、そうした『観普賢經』の注釈書の一つです。じつは、この本の奥書には「此の書、慈覚大師の草（=草稿）と云々」と記され、本書は円仁の著作であるとの伝承が存在していたことが分かります。もしも本書が円仁の真撰であるならば大発見ですが、真偽については今後の内容検討を待つほかありません。

なお、この本を書写した禅寂（生没年未詳）は、『方丈記』などの作者として知られる鴨長明（1155-1216）の親友であり、長明没後に追善のため『月講式』を作ったことで知られています。本資料は、そうした長明周辺の文化的動向を窺わせるものとしても貴重です。

【3】鶴見大学図書館蔵。登録番号1077371。奥書に建保五年（1217）校了とあることから、それ以前の写。列帖装1冊。25.3×15.8cm。雲母引白地唐草文表紙、押八双あり。表紙左側に書題簽「観普賢經私記 如来蔵」あり。墨付27丁。半丁7行、各行20字程度。押界あり（界高22.5、各行幅1.9cm）。第1丁に本書の概要を記し、第2丁オモテに内題「観普賢經私記」を記す。尾題「普賢經私記」。「一校了」とあり。奥書「〈本云〉保元三年十月十日於白河御房手自書写之此書慈覚／大師草云々三井本也書本文字狼藉歟 沙門澄憲〈卅三〉／建保五年八月十三日書校了為補如来蔵之闕也／沙門禅寂／以正本重可比較」（27オ）、「或人云此記慈覚大師記云々／私云廣智并奉借書籍於慈覚大師之目録有／普賢私記若此記歟可尋之 禅寂」（同ウ）。このうち「〈本云〉……沙門澄憲〈卅三〉」は、親本ではなく対校に用いた本の奥書か。参考、池田利夫「鴨長明の大原と日野 一禅寂伝に関する新資料管見」（『源氏物語回廊』笠間書院、2009年。初出1997年）。

## (2) 「分科」を図解する

經典の読解において「分科」が重要視されたことに伴い、その分科のしかたを説明するに際しては、単に文章としてだけでなく、視覚的にわかりやすく示そうという工夫も行われました。以下では、そうした「分科」を示すための工夫を見てゆきましょう。

### 【4】孟蘭盆經疏科図〔鎌倉中期〕刊

孟蘭盆、いわゆる「お盆」の先祖供養を説いた經典に『孟蘭盆經』があります。この經典の注釈書としては、中国華嚴宗の第五祖と仰がれる唐代の僧・圭峰大師宗密(780-840)の著作『孟蘭盆經疏』が著名です(「疏」は經典に対する注釈書の意)。

ここに展示した本は、その宗密『孟蘭盆經疏』の科段図(分科を図解したもの)で、宋代の僧・大智律師元照(1048-1116)の作です。なお元照はこのほか、『孟蘭盆經疏』に対する鈔記(注釈書に対する注釈書)として『孟蘭盆經疏新記』を著しています。

この本は、宋で出版された本を覆刻する形で、鎌倉時代に京都・泉涌寺で出版されました。宋代の僧・元照の手になる本図が出版されたことは、まさしく宋代仏教の影響を色濃く受けた泉涌寺らしい事象と言えるでしょう。

【4】鶴見大学図書館蔵。登録番号1053549(登録書名「仏説孟蘭盆經疏科分」)。泉涌寺版。〔鎌倉中期〕刊。折本1冊。30.6×11.0cm。栗皮表紙、中央に外題「孟蘭盆經疏科文」を直書。現存9丁半(後欠)。内題「佛説孟蘭盆經疏科分二」。朱陽方印「岡田眞之藏書」「月明莊」あり。

### 【5】無量壽經〔江戸前期〕刊

『無量壽經』は、『觀無量壽經』『阿彌陀經』とともに「浄土三部經」と総称され、浄土系諸宗で根本聖典とされている經典です。

ここに展示した本では、經典本文の上に科段図が併載されており、それによって、經文中における段落の切れ目が視覚的に分かるようになっています。

ところで、こうしたどこに段落の切れ目を入れ、各段落にどのような標題を付けるかといった問題は、その經典の解釈のしかたに直結しますから、注釈書によって様々です。この本の場合、浄土宗鎮西派の僧・道光(1243-1330)の著作『無量壽經鈔』に示された分科と一致していますから、本資料は浄土宗鎮西派系統の出版物であったことが分かります。

【5】個人蔵。〔江戸前期〕刊。袋綴1冊(当初2冊であったものを合綴したらしい)。27.0×18.0cm。縹色表紙(ほぼ剥落。外題も失われている)。匡郭14.1×14.1cm。半丁8行、各行12字。上部欄外に科段図を併載(分科は道光『無量壽經鈔』に基づく)。冒頭に「無量壽經序」(「夫如来一代之説法……于時永亭(亭)西風天南呂月謹畫草篇忝次本經曰余」)を載せた後、内題「佛説無量壽經卷上(～下)」。本文全体にわたって返点・送仮名・声点が付される。無刊記。佐々木求巳『真宗典籍刊行史稿 補遺』(伝久寺、1988年)4頁に載る「科本浄土三部經」と同版か。

- 【6】浄土三部経 嘉永二年（1849）刊  
 【7】仮名書き観無量寿経断簡 [鎌倉後期] 写 伝・九条良経筆  
 【8】観経疏伝通記 承応二年（1653）刊

浄土三部経の一つである『観無量寿経』は、素直に読めば、極楽浄土や阿弥陀仏、来迎往生の様子などを観想する、瞑想修行の方法を説いた経典のように見えます。

しかし、浄土系諸宗で高祖と仰がれる唐代の僧・善導（613-81）は、この経典に対する注釈書『観経疏』（「疏」は経典に対する注釈書の意）において、分科を工夫することで独創的な解釈を試みました。すなわち、精神統一を伴う瞑想修行を説いたのは経典の前半部分のみであり、後半部分に説かれた来迎往生の記述は、精神統一を必要としない、散漫な心のままで取り組める修行であるとしたのです。その上で、釈尊が真に伝えたかった修行法は後者であり、特に称名念佛こそが仏の本願に適った最重要の修行である、と結論づけました。

この『観経疏』は、浄土系諸宗では教義の根幹をなす書物として重要視され、ここに展示した浄土宗鎮西派の僧・然阿良忠（1199-1287）の著作『観経疏伝通記』に代表されるように、多くの鈔記（注釈書に対する注釈書）が作成されました。

【6】鶴見大学図書館内山文庫蔵。登録番号0101689（登録書名「三部妙典」）。嘉永二年（1849）刊。袋綴1冊。16.9×12.0cm。橙色己繋型押表紙、左肩に刷題簽「三部妙典」を貼付。また表紙中央に「佛説無量壽経／佛説観無量壽／佛説阿弥陀経」と墨書した紙を貼付。匡郭14.2×10.1cm。半丁8行、各行17字。内題「佛説無量壽経卷上（～下）」「佛説観無量壽経」「佛説阿弥陀経」。刊記「嘉永二（己酉）年正月／渋谷山御蔵版／御蔵板調進所／室町通佛光寺下町／中島利左衛門」（「渋谷山御蔵版」は篆書体で記す。「渋谷山」は真宗佛光寺派本山・佛光寺の山号）。遊紙ウラに「贈呈／内山憲堂君」「蘆谷蘆村」と墨書。

【7】鶴見大学図書館蔵。登録番号1075332（登録書名「[観無量寿経(断簡)]」）。[鎌倉後期]写。断簡1葉（4行分）。本紙25.6×9.9cm。押界あり（界高21.2、各行幅2.4cm）。本文「ことし・もろ／＼の天の童子・自然に中に／あり・一々の童子・五百億の・釋迦毗楞伽／摩尼をもて・瓔珞とす・その摩尼のひか／り・百由旬をてらす・なをし百億の日」。『観無量寿経』を延書きにしたもので、当該箇所は宝樹観の「如梵王宮……百億日月」（T12.342b09-12）に相当。極札「後京極殿良経公（前廉御筆／ことし）[琴山]」が添う。現在は掛幅装。

【8】鶴見大学図書館蔵。登録番号1289523～37（登録書名「観経玄義分傳通記」「観経序分義傳通記」「観経定善義傳通記」「観経散善義傳通記」）。承応二年（1653）刊。袋綴15冊。26.7×17.3cm。栗皮表紙、左肩に刷題簽「傳通記」（外題下部に巻番号を記す）を貼付。各冊とも表紙右肩に亀甲形の紙を貼付し「神」と墨書（序分義卷二のみ未記入）。匡郭21.4×15.2cm。半丁10行、各行20字。内題「観経玄義分傳通記卷第一（～六）」「観経序分義傳通記卷第一（～三）」「観経定善義傳通記卷第一（～三）」「観経散善義傳通記卷第一（～三）」。「序分義卷三の末尾に刊記「承應貳年／（癸巳）九月吉日」「洛陽三條寺町誓願寺前／安田十兵衛開板」あり。玄義分巻一の見返しに「全部十五巻／持主秀慧」と墨書。

【9】当麻曼陀羅図〔江戸前期〕図

前述のように、善導の『観経疏』では、『観無量寿経』の分科を工夫したことが、独自の教義の提唱につながりました。その意味で、〈経典をどう段落分けするか〉という問題は、いわば善導『観経疏』の教義の命であったと言っても過言ではないでしょう。

この善導『観経疏』の分科に忠実な形で『観無量寿経』の内容を絵画化したのが、ここに展示した「当麻曼陀羅図」です。この図像のオリジナル(根本曼陀羅)は、奈良県の当麻寺に今も伝わる、約4メートル四方の巨大な綴織作品です。根本曼陀羅は、唐で制作され、奈良時代に当麻寺へもたらされましたが、その後、長い歴史の中で忘れ去られていました。それが鎌倉時代に再発見され、しかも浄土系諸宗の重視する善導『観経疏』に示された分科と一致していたことで、一躍脚光を浴びます。そうした中で、中世から近世にかけて多数の縮小模本が制作され、全国各地へと広められました。

このように当麻曼陀羅図は、いわば善導『観経疏』の提唱する分科をわかりやすく図解した絵画作品であると言えるでしょう。中世から近世にかけての人々は、この当麻曼陀羅図の絵解きを聴くという形で、『観無量寿経』の分科に自然と親しむことが出来たのです。

【9】個人蔵。〔江戸前期〕図。掛幅装1幅。絹本着色。本図84.8×78.0cm。織付縁起は点綴式。散善九品の来迎は立像形式。

## 2 歌書の〈リファレンス〉

### (1) 和歌の権威と勅撰和歌集

和歌は、日本文学史の中でも極めて特殊な文芸です。延喜五年(905)成立の『古今和歌集』にはじまる代々の勅撰和歌集の存在は、和歌という文芸に対し、天皇の権威に裏付けられた特権的地位を与えることに繋がりました。折しも、正史や法典(律令格式)といった、国家構造の骨格となるはずの典籍類が編纂されなくなった時代、唯一の国家的編纂物というべき勅撰和歌集の存在は、和歌文芸に対し、きわめて政治的な意味合いを持たせることとなったのです。

#### 【10】<sup>にじゅういちだいしゅう</sup>二十一代集 <sup>江戸前期</sup>写

延喜五年(905)成立の『古今和歌集』に始まる勅撰和歌集は、鎌倉中期以降になると、ほぼ各天皇の代ごとに編纂されるようになりました。それに伴い、編纂のための機関である「和歌所」も事実上常置されるようになり、勅撰集編纂のためのさまざまなノウハウが蓄積されてゆきます。しかし、そうした編纂に必要な知識・技術も、応仁の乱(1467-77)による編纂中断以降途絶してしまい、勅撰集の時代は終わりを迎えました。最初の集である『古今集』以来、最後の集となった『新統古今集』に至るまで、合計21の勅撰集が作られたので、これらを総称して「二十一代集」といいます。

ここに展示した本は、江戸時代初期の公家・飛鳥井雅章(1611-79)が主導する形で書写された、揃いの「二十一代集」です(副本。正本は宮内庁書陵部に現存)。その親本として主に活用されたのは、応仁の乱直後の時期に書写された、いわゆる「文明補充本」の二十一代集でした。「文明補充本」は、二十一代集を一揃いのものとして一括書写した、存在が確認できる中で最古の本です。残念ながら万治四年(1661)の内裏火災で焼失してしまいましたが、本資料はその面影を今に伝えています。西本願寺歴代門主の蔵書「写字台文庫」の旧蔵書です。

【10】鶴見大学図書館蔵。登録番号1402162~63(登録書名「新古今和歌集」、1156967(「新勅撰和歌集」、1404062~63(「統古今和歌集」、1402164(「統拾遺和歌集」、1131186(「新後撰和歌集」、1156968~69(「玉葉和歌集」、1402165(「統後拾遺和歌集」、1436173~74(「新千載和歌集」、1121495~96(「新統古今和歌集」)。  
〔江戸前期〕写。列帖装14冊。25.0×17.8cm。茶地丁字吹表紙(金銀等の縦線模様あり)、左肩に書題簽(雲紙。飛鳥井雅章筆か)を貼付。半丁10行、和歌は1首1行書き。料紙は斐紙。写字台文庫旧蔵。

## (2) 「題詠」とリファレンス

このように特権化され、政治的権威を帯びることとなった和歌文芸は、極めて保守的な傾向を示します。何らかの事物（例えば動物や植物、地名など）を和歌に詠む際、その事物のどういった点を讃美し称揚するのかを、歌人自身が自由に決めることはできませんでした。「この事物を和歌に詠む際にはこういった点に着目する」という規範（「本意」）が慣習的に存在し、和歌を詠む際にはその規範に則していることが強く求められました。そしてそれに伴い、特に中世以降、和歌の最も基本的なスタイルは「題詠」になりました。題詠とは、あるお題を与えられ、その出された題こたに応えるように和歌を詠むという形式です。和歌は、決して自由な感情の発露ではなく、むしろ昔からの強固な規範的枠組みの中で表現のテクニックを競う文芸だったのです。

こうした状況の中で、「それぞれの題や事物が昔からどう詠まれてきたのか」「どのような詠み方をすれば周囲の求めに応えられるのか（侮られずに済むのか）」といった関心から、先行する和歌を〈集める〉〈整理する〉ための工夫が、和歌関係典籍の分野では発達しました。以下では、そうした歌書における工夫の様子を覗いてみましょう。

### 【11】ぞうほわかだいらんしょう 増補和歌題林抄 安永六年（1777）刊

題詠においては、「与えられた題にどのような含意があるのか」——換言すれば、「その題はどのような和歌を詠むことを要請しているのか」を理解することが、重要な意味をもちます。そのため、さまざまな題について、その意図するところを解説した書物が作られました。

ここに展示した『増補和歌題林抄』は、室町時代の碩学・一条兼良（1402-81）によって編纂されたとの伝承をもつ、さまざまな題の意図を例歌とともに解説した書物『和歌題林抄』を基に、江戸時代の学者・北村季吟きたむらきぎん（1624-1705）が増補を加えたものです。中世から近世に至るまで、「題詠」に対して少なからぬ関心が寄せられ続けていたことが窺われます。

【11】鶴見大学図書館蔵。登録番号0025628～30、0041502～06、0043910～11、0043928。安永六年（1777）刊。袋綴11冊。22.7×16.0cm。縹色草花菱紋型押表紙、左肩に刷題簽「〈頭書／再版〉増補和歌題林抄」（外題下部に巻番号・部立を記す）を貼付。匣郭19.2×13.9cm。半丁12行。内題「増補和歌題林抄上之一（～下之五）」。  
最終冊末尾に刊記「寶永三丙戌歲菊月如意日／安永六丁酉歲文月如意日再刻／東都日本橋壹町目書林須原屋茂兵衛／皇城五條通塩竈町書舎北村四郎兵衛〈壽梓〉」あり。

【12】和歌方輿勝覽 <sup>わかほうよしやうらん</sup> 〔江戸期〕写

和歌に詠むうえで「本意」を踏まえなければならない事物は、動物や植物ばかりではありません。地名、すなわち歌枕 <sup>うたまくら</sup> にもまた、そうした「本意」がまとわり付いていました。たとえば吉野山を詠むときには桜の景色を讃え、龍田川を詠むときには紅葉の景色を称揚する、といったように、和歌において特定の地名を詠む時にも、「その土地が昔から慣習的にどう詠まれてきたのか」を調べ、踏まえなければなりません。たとえ、初夏に訪れた吉野山の鮮やかな青葉にどれほど感動したとしても、新緑の吉野山の景色を和歌に詠むことは、通常は許されなかったのです。

ここに展示した『和歌方輿勝覽』は、それぞれの土地ごとの代表的な古歌を列举した、名所歌集の一種です。本書は、『詞枕名寄』 <sup>うたまくらなよせ</sup> などの先行する名所歌集に載せられた和歌を基盤としつつ、その中でも各土地ごとの「本意」が特によく表れた歌を厳選するという形で作られました。

本書を編纂したのは、桃山～江戸最初期 <sup>ごようぜい</sup> の後陽成天皇（1571-1617）でした。いわば後陽成天皇は、本書の編纂を通して、日本国土全体を観念レベルで統治しようとしたとも言えるでしょう。日本全国のさまざまな土地が和歌の規範の中で意義を与えられ、その集積として国土全体の秩序意識が構築されていた様子が窺われます。

【12】鶴見大学図書館蔵。登録番号2021007。〔江戸期〕写。袋綴1冊。16.8×11.2cm。茶色無地表紙、左肩に外題「和歌方輿勝覽」を墨書。墨付123丁。半丁10行。内題なし。朱陽円印「聖護院蔵書記」あり。小川剛生「禁裏における名所歌集編纂 一方輿勝覽集」(『中世和歌史の研究 一撰歌と歌人社会』塙書房、2017年。初出2009年)の伝本系統分類における「c 名所イロハ別の本」に該当。

### (3) 『万葉集』をどう受けとめるか

古歌を調べるうえで厄介なのが、奈良時代後期頃に成立した『万葉集』です。『古今和歌集』以降の勅撰和歌集であれば、「四季」や「恋」といった部立ごとに整然と和歌が排列されていますから、ある題や事物が過去にどう詠まれてきたかを調べたければ、歌集中の然るべき箇所を見ればおよそその目的は達成できます。しかし『万葉集』の場合、巻ごとに排列基準が異なるうえ、全体で4500首以上にもなるという大部な内容、しかも原典は万葉仮名で書かれている……と、収録歌を調べるのもひと苦勞だったはずです。

以下では、そんな『万葉集』を後代の人々が参照・活用する上での、苦勞と工夫の様子を覗いてみましょう。

- 【13】万葉集 卷十四断簡 [鎌倉後期] 写 伝・尊円入道親王筆  
【14】万葉集 卷十九断簡 [鎌倉後期] 写 伝・尊円入道親王筆

『万葉集』が成立したのは、平仮名がまだ発明されていなかった時代です。そのため、いわゆる「万葉仮名」によって歌本文が表記されたことから、後の時代になると容易には読めなくなってしまいました。それに伴い、『万葉集』を解説するための研究がなされるようになりました。

一口に「万葉仮名」といっても、一字一音で書かれたもの（音仮名。一般に「万葉仮名」と言われて思い浮かべるのはこちらでしょう）もあれば、漢字の訓を借りて日本語の音節を表現するもの（訓仮名）もあります。訓仮名とは、たとえば詠嘆の終助詞「かも」を「鴨」と表記するといった類です。

ここに展示したうち、【13】のほうは音仮名で書かれているので、もし傍訓が無かったとしても読解は比較的容易でしょう。しかし【14】のほうは訓仮名で書かれているため、容易には読み方を定めることができません。この点が、後代の人々を悩ませることとなりました。

【13】鶴見大学図書館蔵。登録番号1084792（登録書名「[万葉集(断簡)]」）。[鎌倉後期]写。断簡1葉（3行分）。本紙31.3×8.2cm。上下に金界線あり（界高27.0cm）。本文「安能於登世受由可牟古馬母我可都思加ノ乃麻未乃都藝波思夜麻受可欲波牟ノ右四首下総國歌」（3387番歌）。極札「青蓮院殿尊圓親王（安能於登）[琴山]」が添う。金沢文庫切。現在は掛幅装。

【14】鶴見大学図書館蔵。登録番号1406437（登録書名「[万葉集：断簡]」）。[鎌倉後期]写。断簡1葉（3行分）。本紙32.6×8.9cm。上下に金界線あり（界高27.6cm）。本文「之潜取云真珠乃見我保之御面多太向将ノ見時麻泥波松栢乃佐賀延伊麻佐祢尊安ノ我吉美（御面謂之美於毛和）」（4169番歌）。極札「青蓮院殿尊圓親王[琴山]」御文庫切」が添う。金沢文庫切。

【15】万葉集 卷四断簡 [鎌倉後期] 写 伝・藤原為継筆

『古今和歌集』にはじまる勅撰和歌集が「四季」「恋」といった部立ごとに整然と排列され、歌集全体としての体系性を具えているのとは異なり、『万葉集』の場合、ある巻では詠まれた年代順、ある巻ではテーマ（後代の「部立」に相当）ごと、またある巻では詠まれた地域別……と、巻ごとに排列基準が異なり、集全体としての体系性は存在しません。そのことが、『万葉集』を参照・活用する上での、障壁の一つであったと言えるでしょう。

ここに展示した断簡は、『万葉集』巻四の目録部分にあたります（513-18番歌に相当）。巻四の場合には、相聞歌（恋の歌）を概ね時代順に排列するという方法が取られていました。

なお、この断簡の中では、志貴皇子（?-716）の名が他より一字分高い位置から書かれています。志貴皇子といえ、天智天皇（626-71）の皇子にして、光仁天皇（709-81）の父君に当たる人物。そんな皇子を敬う意図のもと、こうした特別な表記方法が取られました。

【15】鶴見大学図書館蔵。登録番号1421539（登録書名「[万葉集：断簡]」）。[鎌倉後期]写。断簡1葉（6行分）。本紙23.2×15.8cm。本文「志貴皇子御歌一首／阿倍女郎歌一首／中臣朝臣東人贈阿倍女郎歌一首／阿倍女郎報贈歌一首／大納言兼大將軍大伴卿歌一首／石川郎女歌一首（即大伴佐保大家也）」（巻四目録部）。極札「法性寺殿為継卿（志貴）[牛菴]」が添う。

【16】万葉集 抄出断簡 [室町後期] 写 伝・宗全筆

『万葉集』が集全体としての体系性を有しない以上、「特定の事物が『万葉集』の中でどう詠まれているのかを調べたい」という時には、全4500首以上もある『万葉集』の歌の全てに目を通さねばならず、大変な労力がかかります。そこで後代になると、『万葉集』の歌をテーマ別に並べ替えて再編集した類纂本が作られ、活用されるようになりました。

ここに展示した断簡は、『万葉集』所収歌のうち秋の歌のいくつかを集めたものです。歌番号と所収巻を順に示すと、1555（巻八）、1686（巻九）、2010（巻十）、2018（同）、3611（巻十五）、3900（巻十七）、2169（巻十）、2132（同）、2237（同）、1532（巻八）となっており、本来の排列や所収巻からは大きく組み替えていることが分かります。本資料からは、歌本文を読みやすく平仮名書きにし、かつテーマ別に再編集するといった、『万葉集』を活用するための工夫の跡が窺われます。

【16】鶴見大学図書館蔵。登録番号1282028（登録書名「[万葉集抄出(断簡)]」）。[室町後期]写。断簡1葉（11行分）。本紙26.4×17.4cm。極札「堺連哥師宗全 秋たちて[養心]」が添う。綴穴痕あり。高田信敬「室町時代の『万葉集』享受 一伝宗全筆四半切」（『文献学の栞』武蔵野書院、2020年。初出2009年）は本資料につき、『類聚古集』の訓読仮名書きから約1400首を抄出した『類聚万葉』に基づき、『類聚万葉』の何分の一かの量の簡便な書物にしたものではないか。学術的と言うよりは、和歌連歌詠のための、実践的でいかにも手軽な万葉手引き書一『源氏小鏡』・『名所方角抄』の如き一を目指したものであろう」と推測する。

※本展示に際し、関連企画である仏教文学会シンポジウム「リファレンスとインデックス—仏教・和歌から考える—」登壇者の猪瀬千尋氏（金沢大学）・川上一氏（国文学研究資料館）・甲斐温子氏（静岡大学）よりご協力を頂きました。記して御礼申し上げます。